

【 愛について 】

はじめに

今日は「愛」についてお話ししたいと思います。みなさんは「愛」という言葉にどのようなイメージをお持ちでしょうか？当然良いイメージをお持ちだと思います。しかし古来日本語の「愛」という言葉はあまり良いとは言えない意味で使われていました。

もともと「愛」という言葉は、人に対して使う場合、親が子に、あるいは男が女に対する行為について用いられており、相手を対等な人間として認めて尊重するというのではなく、「かわいがり、離すまいとする」「かわいがる」「もてあそぶ」という、自己本位のものでした。

それらは、愛着・愛欲・愛撫・愛好などのことばに近い内容のもので、目上から目下、あるいは強者から弱者への、自己本位な行為・感情にほぼ限られて使われていました。ですから、「愛す」という語は、仏教語として用いられる場合、悟りを妨げる行為として「科」（とが）ととらえられていましたし、日本のキリシタン達も「愛する」ことを、「悪」としてとらえていたのです。ですから彼らはその代りに「ご大切」という言葉を用いていました。

現代の私たちは「愛」をそのような意味で捉えてはいませんが、テレビや映画などを見ていますとあながち違うとも言い切れないのが現状です。昨年大ヒットを記録した映画と言えば「アナと雪の女王」ですが、そのお話の中でオラフという雪だるまの妖精が「愛とは、人を自分よりも大切に思うことだよ」と言っていました。これに異を唱える人はいないでしょう。聖書も言います。

ヨハネ 15:13 人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

1. ヘブル語の愛

ではヘブル語ではどうでしょう。「愛する」はアーハヴ(אהב)で、三つの文字で構成されています。「神」を表すアーレフ(א),そして「見る、生きる」ことを表すヘー(ה),そして「家、家族、国、国民」を表すベート(ב)。これらの意味を組み合わせるとアーハヴには「神が見る家」「神が生きる家」という概念を持っており、私たちが持っている愛の概念とは大きく違うことが解ります。では「神が見る家」とはどんな家なのでしょうか。これを知るには聖書の中で「愛」という言葉が初めて使われた記事を調べるのが重要です。

創世記 22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

ここはモリヤの山、後のエルサレムです。神はこの場所で初めて「愛する」アーハヴという言葉を使われました。すなわち「神が見る家」それはエルサレムを指しているのです。そしてこのアブラハムがイサク

をささげる行為はイエシュアの十字架を指しています。つまり「神が生きる家」は「神がいのちをかける家」と理解することができます。そしてこの出来事はアブラハムと、そして息子であるイサクとの共同作業です。イサクの従順がなければこれは成し得ませんでした。ここにこの「神が見る家」のために御父と御子が一つになってまさに「いのちがけ」でそれを建て上げようとするのが表されています。それがこのエルサレムなのです。因みにエルサレム(עִיר־שָׁלוֹם)は、イエラーエ(הַיְיָ) (語根はラーア(הָאָה))で「見る」という意味の言葉と、そしてシャーレーム(שָׁלוֹם)「回復、完成」の意味を持つ言葉との合成語と解釈することができます。合わせると「完成を見る」となります。アブラハムはこの場所をアドナイ・イルエと名付け、それは「主の山には備えがある」と訳されていますが、直訳ではアドナイ(הַיְיָ)は「主」で間違いないのですがイルエは「備えがある」というような意味ではなく、先ほどのエルサレムと同じイエラーエ、(すなわちラーアで「見る」の意味)が使われているのです。つまり直訳では「主は見る」となるのです。またこの「見る」は単に眺める、見つめるという意味だけでなく「Vision」「計画」として見るという意味があると考えられます。これは以前お話しした聖書という書物自体がベート「家」を意味する文字から始まっていることともつながってきます。

このように、聖書が示す「愛、愛する」アーハヴは神の家、すなわち神の国を建てる計画に関わる意味をもつ言葉であることが解ります。この概念で愛を捉えようと、聖書の読み方を大きく変更せざるをえなくなります。なぜなら…

Iヨハネ 4:8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

このみことばをアーハヴの概念で訳すならばこうです。

「神が Vision として見ておられる家 (国) を共に見ない者に神を理解することはできません。
なぜならその家を完成させるために、神はいのちをかけておられるからです。」

となります。

2. 友について

ではこの事実をふまえて、次にヨハネの 15 章で語られている内容に触れながら「友」という言葉を、アーハヴの概念で見てください。

ヨハネ 15:13 人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。
15:14 わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です。

友と訳されていますが、これはヤーディード (יָדִיד) と言い、「愛する者、愛されている者」という意味で、この愛をアーハヴの概念で考えるとどうなるのでしょうか。イエシュアの友とは、イエシュアが王として治める神の家 (王国) において、イエシュアと共にアーハヴ、すなわち神の家 (国) を見る者、見張る者、すなわち治める者と解釈することができます。なぜならイスラエルの歴史において王の友は王、またはそれに近い立場の者であるべきだからです。

また重要なことは、このみことばは、12 弟子に対して語られたものであることを覚えなければなりません

ん。12 弟子に対して「友」と呼んでおられるのです。つまり一般的な友の概念、親愛の情などで語られたものではなく、また不特定多数の者に語られたものでもなく、具体的な神の国の計画に基づいて語られたものなのです。なぜならこうあるからです。

マタイ 19:28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。

有名な讃美歌で「いつくしみ深き友なるイエス」という歌がありますが、アーハヴの概念、神の国の計画の視点で見る「友」はこのように非常に重い立場を意味しています。しかもこれは注意すべき点ですがイエシュアは弟子たちを友と呼ばれたのですが、逆にそのイエシュアに対して、また神に向かって「友よ」と呼んだ者は誰もいません。この「友」という言葉は、あくまでもイエシュアから弟子たちに向かってかけられたものであり、弟子たちの方からイエシュアに気軽にかけられるような言葉ではないのです。アーハヴの概念、ヤーディードの概念で「友」を解釈するならば、もしイエシュアに対して「友」と呼べる者がいるとすればそれは神の国が実現した時においてであり、今ではありません。しかも誰でもがそうなれるわけではないのです。

3. しもべから友へ

ヨハネ 15:15 わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。

またこのようにアーハヴの概念で見る「友」とは、主人である父なる神の計画、すなわちアーハヴにこめられた神の国の Vision をすべて知らされた者、あますところなく伝えられた者のことです。

使徒の働き 20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

この言葉を語ったパウロは、12 弟子ではありませんが神のご計画の全体を知った人物でした。つまりイエシュアに「友」と呼ばれるに相応しい人物であったことが解ります。そしてパウロは自分の弟子たちにもそれを「余すところなく」伝えました。ですから私たちも「神のしもべ」ではなく、「神の友」いや「神に友と呼ばれる者」にならせていただきたいものです。